

トレーニング経過

1992年6月に部内に企画案を出して以来、下記の通りのトレーニングを行って来た。下記トレーニングの他に週末の京都保津湊谷での練習も欠かさず行った。企画案を出した当時は、中国クリム川遠征が終わって経験のある上級生は卒業、新分野開拓と慌ただしかったため河川航行の分野では春日（当時新2回生）がリーダーとなり、主に新入生を引き連れて1からの出発であった。

1992年

注）先頭の名前がリーダー

（ ）内は当時の年次

夏合宿 釧路川（97km） 春日(2)、藤巻(1)、高木(1)、
十勝川（91km） 戸谷(1)、関谷(1)、田島(1)、土山(4)

当初はカヤックで遠征を試みていたのでファルトボートでの航行訓練に励み、その傍らカナディアンカヌーの練習にも励む。カヌー航行に関しては無知な者が多く、サポートの土山先輩に叱られながら2河川を航行する。釧路川の源流 屈斜路湖から太平洋まで航行しバス・電車を乗り継いで十勝川の源流へ向かった。部の倉庫に代々眠っていたファルトボート2艇とクリム川遠征隊のお下がり の空気注入式カナディアンカヌー2艇を使用するが、倉庫に眠っていたファルトボートのうち、1艇は老朽化のため戸谷の転覆と共に釧路川の藻くずと化してしまう。牧場にテントを張り寝て起きるとホルスタインの大群に囲まれ、テントの脇に置いてあった食糧がよだれだらけになっていたのが印象的だった。



秋合宿 木曾川（110km） 春日(2)、藤巻(1)、高木(1)、
郡長良川溯航 戸谷(1)、関谷(1)、田島(1)、小紫(1)

夏合宿でカヤックに慣れたため、レベルアップをはかり前よりグレードの高い河川に挑戦する。しかも木曾川を航行し終えた後伊勢湾に出て長良川を河口から上って行く計画だ。木曾川河口では、満ち潮の影響で難航となり、漕いでも漕いでも一向に進むことができなかったが、長良川を溯航する際には逆に満ち潮に押されどんどん進めた。春日が自腹を裂いて購入した2人乗りカヤックが初めて登場した合宿でもあった。



冬合宿 琵琶湖 (90 km) 春日(2)、藤巻(1)、高木(1)、戸谷(1)、関谷(1)、内山(1)、谷(1)

アラスカ遠征を想定して、真冬の琵琶湖で耐寒・耐風訓練を行いながら遠征本番でも必至となる巨大な湖縦断の練習を行う。長浜をスタートして半時計回りに湖岸を大津まで漕ぐ。予想通り厳しい暴風・暴雪に見舞われ辛い合宿となる。琵琶湖再北端近辺では猛吹雪のために陸の孤島に閉じ込められてしまい、食糧が底を尽きかけてきたので強行出発したが結果は高木の転覆に終わり、しかもその晩には残り少ない食糧をかき集めてスープを作るが出来上がった瞬間に高木がつかずいて鍋をこぼしてしまいテント内に散乱した具をかき集めての夕食であった。あまりの寒さで凍傷にならないように手や足にマーガリンを塗ってカヌーを漕いでいた。結局時間切れで雄琴で合宿を中止するがその後も春日、藤巻、高木の3人の有志でゴールを目指して漕ぎ進む。身につける装備を検討する必要性を感じた合宿であった。高木が自腹で2人用カヤックを購入。



1993年

春合宿 長良川 (111 km) 春日(2)、藤巻(1)、鹿野(2)、戸谷(1)、関谷(1)、池本(1)、内山(2)、土山(4)

さらにグレードアップをはかり、中部地方では激流として有名な長良川に挑戦する。装備点検の手違いで空気注入式カヌーの空気注入バルブを大阪に忘れ、危うく合宿中止となる所であったが、激流航行用にもって来ていた大型ラフトボートを激流だけでなく下流部でも使用、つまり水面に対する抵抗が多くスピードのおそいラフトで全流航行するはめになった。



5月新歓合宿 四万十川 (87 km) 藤巻(2)、関谷(2)、戸谷(2)、高木(2)、宮本(1)、田中(1)、野口(1)、春日(3)

新入生歓迎合宿であったためリーダーを新2回生の藤巻にとらせる。遠征に向けてのトレーニングはできなかったが、清流四万十で新入生を教育する。しかし今となっては、この時連れて行った1回生のうち河川パートに残留している者は一人もいない。この合宿の時の写真は撮影係のミスにより写真はない。

夏合宿 千曲・信濃川 (270 km) 春日(3)、鹿野(3)、藤巻(2)、利根川 (259 km) 高木(2)、関谷(2)、戸谷(2)

遠征を翌年にひかえ、最後の夏合宿となる。この頃には遠征艇を空気注入式のカナディアンカヌーに変更していたため、この合宿において荷物の積載限界、食糧の無補給航行の限界など様々な各務の研究を行う。合宿全般にわたり天気は不安定な日が多くて、停滞前線に悩まされ続けたのであった。また、千葉県利根川下流部航行中には例年にないような巨大台風の直撃を受け、風に押し潰された

テントの中にできた池で凍えながら一晩過ごしたこともあった。台風が去った未明の月の赤さが未だに記憶に残っている。しかしその一方、一旦太陽が顔を出すとゴム製カヌーの上は天然サウナになり、平野部の猛暑に我々の体力をじわじわと吸い取られた。炎天下でダム越えの連続、台風直撃などにより隊員一同精神的・肉体的に鍛え上げられる。当初は夏の関東ということで河川の渇水が心配されたがそれも杞憂で、逆に降り続く雨で大增水した濁流が我々を待ち構えていた。信濃川激流部ではこの世のものとは思えない程の濁流に遭遇し、荷物満載の我々のカヌーなど一撃で弾き飛ばされ数え切れないほど転覆をした。信濃川の激流地帯が雨で増水したときは、カナディアンカヌーの限界を知らしめられバスでの移動を余儀なくされた。利根川では藤巻の買ったばかりのファルトボートが波の破壊力に耐え切れず木っ端微塵になってしまった。この一夏の経験は我々にとって遠征を成功させる大きな自信となったに違いない。



秋合宿 木曾日本ライン 春日(3)、鹿野(3)、藤巻(2)、高木(2)、関谷(2)
戸谷(2)、田島(2)、榊原(1)、重蔵(1)

空気注入式ではない金属製のカナディアンカヌーを試してみようとレンタカーを借り、屋根にカヌーをくくりつけて岐阜へ向かう。空気注入式に比べスピードはあるのだが安定性に欠け、ちょっとバランスを崩しただけでも転覆してしまう。鹿野と戸谷が瀬のなかで転覆したときは浮力がないため川底に沈んでしまい引き上げるのに一苦労であった。おまけに普段の持ち運びが不便なのでこのカヌーは遠征で使用するのは無理であると結論を出した。



冬合宿 琵琶湖 (80 km) 春日(3)、鹿野(3)、藤巻(2)、高木(2)、
関谷(2)、榊原(1)、

去年の琵琶湖航行は西岸を南下したのに対し、今年は東岸を南下する。去年は暴風暴雪に対して個人装備が不完全であったため辛い航行となったが、ことしは個人の防寒装備を強化していたため寒さも気にならなかった。合宿初日に関谷隊員が風邪で倒れ2日間様子をみたが回復せず、合宿前半に帰宅させ残りのメンバーで行程を消化する。



1994年

春合宿 天塩川 (175 km) 春日(3)、鹿野(3)、藤巻(2)、
石狩川 (125 km) 高木(2)、関谷(2)、戸谷(2)

大雪のために天塩川は途中から厚い氷に閉ざされ前に進むことができなくなり中流部で航行を断念。凍りを砕きながら前進することを試みてみたが、なにしろ厚さ50cmもある凍りの上にさらに1m近い雪がありとても進める状態ではなかった。石狩川では凍結のためスタート地点をやや下流に変更したが、止むことのない向かい風と聞いながらも日本海に到着できた。両河川とも大雪のなかの航行となり、兩岸は2m近いオーバーハングした雪の壁で上陸するのに苦労する。夜中は氷点下20度の世界で、じんじん冷え込んで眠れたものではなかった。この合宿がアラスカ遠征最後のトレーニング航行となる。



以上、遠征までの2年間に行った主な国内訓練合宿を記したが、全体的にサディスティックで馬鹿馬鹿しいものが多いにもかかわらず、不平を言わずについて来てくれた隊員達に感謝する。

航行経験のある主な河川

及びユーコン河の勾配表

河川名	地名	高度 (m)	水平距離 (km)	落差 (m)	河床勾配 (m/km)
保津川	船橋・保津大橋	86.0			
	馬場・請田神社	85.0	2.1	1.0	0.48
	保津駅	60.0	6.4	25.9	3.91
長良川	郡上八幡	203.5			
	深戸	170.2	8.5	33.3	3.92
	羽安	149.3	5.5	20.9	3.80
	木尾	106.5	11.5	42.8	3.72
四万十川	昭和町	98.8			
	江川崎	45.0	11.0	53.8	4.89
釧路川	屈斜路湖	121.0			
	弟子屈町	95.0	24.7	26.3	1.05
木曾川 (日本ライン)	今渡ダム	76.5			
	大山橋	45.4	12.0	31.1	2.59
千曲川 濃川	大星	460.0			
	西大滝	300.0	105.0	160.0	1.52
	長野・新潟県境	230.0	15.0	70.0	4.67
利根川	沼田	312.0			
	前橋	107.1	36.0	204.9	5.69
	本庄	50.3	20.0	56.8	2.84
ユーコン河	Bennett Lake	656			
	Dawson	366	860.0	290.0	0.33
	Tanana	76	1020.0	290.0	0.28
	Bering sea	0	1190.0	76.0	0.06

※ 上記の数値はすべて国土院発行の5万分の1地形図をもとに記しているが、多少の誤差が生じていることに注意。
上記の河川における計測区間は任意に選択したものである。